

[翻 訳]

カナダ詩人訳詩集Ⅱ

ロバート・クロウチ、ジョン・ニューラヴ、
アンドリュー・スクナスキイ、ローナ・クロウツィアー詩篇より

松 田 寿 一

収録詩

ロバート・クロウチ

「石槌の詩」

「種の目録」より

「その名を唱えながら」

ジョン・ニューラヴ

「父さんは溺死させていた」

「ヒッチハイカー」

「どの地平からも」

「ドゥホボル」

「機関車と海」

「温かい風」

「夢」

「車を走らせながら」

アンドリュー・スクナスキ

「トニータ牧場はずれのインディ

アン住居跡」より

「フィリップ・ウェル」

「アーニー・ハドソン」

「ヴァンクーヴァー行き夜行バス」

「マニトバ州トルストイ村の西

(1900年)」

「踏切 —— ラッセル・マロアを

偲んで」

ローナ・クロウツィアー

「アビの歌」

「野ガン」

「雪の天使」

「夜の庭」

「キャロット」

「ジャガイモ」

「ズキーニ」

「パンを焼く人」

「第7日目に」

「その馬の簡潔な歴史」

ロバート・クロウチ
(Robert Kroetsch)

いしづち
「石槌の詩」¹

1

この石は
石の
槌になるがよい、この棍棒は

骨の
色だ (いや
骨の方が棍棒の
色なのか)。

しかし 生皮の投げ縄は
今はなく それを操る
人間もいない
バッファローの頭骨も
姿を消した；

その石は
子どもの頭の
形をしている。

2

この詩を書き始める

私の机の上の

文鎮は

ある小麦畑で見つかった

遺失していたけれど（この槌
この詩も）。

ある用途のために切り離され

この石は存在した

（その使い手は 今はいないのに——

3

灰色で二つの頭部を持つこの槌は

ペミカン用の槌なのか

トラヴォイから落ちたのか それとも

遊んでいた子どもが

プレーリーウールの草原でなくしたものなのか それとも

インディアンの妻が バッファローの頭蓋骨に

置き忘れたものなのか それとも

石を削り

窪地の水かさ（それとも血の量）を

増大させた

手の持ち主よりも

100万年も

古いものか それとも

4

この石槌は
見つかった

祖父が
自分のものだ
と考えた
農場で

父が自分のものだ
と考えた農場で

5

それは
氷河期ほどにも古い
石だ
後退しながら／
再興しつつある氷塊
後退する
バッファロー
後退するインディアン

（ザイフリボクの白い花が
咲いている（まれには
チョウクチェリーや
アメリカカンボク
ピンチェリーの花が

有刺鉄線沿いに
白く咲きほこる（あの
ペミカンの 冬

6

なんてこった
こいつにぶつかったせいで
畑起こしは
ちょっと中断。

その槌を
いまいましいとは

思わないブラックフット族
（クリー族?）。

?彼は悪態をついたのか
?彼は畑仕事に
戻ろうとしたか
?何があったのか
知らなくてはならない／知り
たい（知りたくはない）
?いったい何があったのか

7

詩は
削られ

槌で打たれる石だ 石の
槌
棍棒のような
形になるまで

8

今 その農地は
私のものだ。
なぜならある若い男
（発育盛りの息子のいる）に

私はそれを譲った（ある値で）
のだけれど
彼は次のことには

気づいていなかったからだ。
つまり息子である私

（その土地を売ってしまった）に
土地をくれたのが
私の父で
父に土地を譲った
（ある値で）
のが
（たまげたことに1エーカー50ドル
しかも わしが木を伐採し
石も全部取り除いたんだ）

祖父で

その祖父に土地を譲った

(ある値で) のが

カナダ太平洋鉄道で

そこに土地を譲渡したのは

女王陛下で

陛下に土地を与えたのが

あのインディアンだったのだが

その土地はそもそも彼のものでもなかったことを。

9

さして驚きではない

かも知れない。

祖父は

その棍棒をなくしてしまった。

10

私の父(退職していた)は

ラズベリーを栽培した。

ジャガイモ畑を掘り起こした。

毎朝

グラスに一杯ワインを飲んだ。

彼は死を前にして

孤独だった。

顔に吹きつける熱い風や
馬のにおい 脱穀機が遠くうなる音
自分が運んだ油差し
尻のポケットに入れていた
三日月形のレンチの重さに対しても
父は孤独だったのだ。

そこに居合わせない息子や
娘たち
妻や
兄弟姉妹たち
そして彼の父や母に対しても
彼は心を閉ざしていた。

自分の小麦畑だ
とっていた土地の
北西部の片隅の
石の積み重ねの上で
父はその棍棒を見つけた。

父はそれを（その
石の棍棒を）裏玄関の手すりの上の
ラズベリー摘みの籠に入れて
ずっととっておいたのだ。

11

私はそれを机の上に

置いている

(その石を)。

ときどき風(熱い風)の吹く日には

それを使うことがある

(紙を押さえておくために)。

それはサヤヌカグサや

たぶん実った小麦のにおい そして

炎天下にたぎる

バッファローの血のにおいが

かすかに漂う。

ときどき私は

その石槌のために

詩を書いたりもする。

1973

*ペミカン 野牛肉などを切干しにして砕き、果実や脂肪をつき混ぜて固めたインディアンの食品。携帯用の保存食品でもある。

*トラヴォイ 北米平原インディアンのそり。馬などに引かせる。

*サヤヌカグサ イネ科の草。葉の先がノコギリの葉のようになった草。

「種の日録」² より

I

品番176——コペンハーゲン・マーケット・キャベツ：「この新種こそ最高の血統を引き継いだキャベツ、まさにキャベツのサラブレッド、世界中の園芸専門家の間に大旋風。」

家の南壁から

防風窓をはずし

私たちはそれらを温床の上に置いた。

それが春の合図だった。 いや、そうではない：

冬が終わりかけていたということだ。

「貴社から購入したあの品種のおかげで今夏の作物の出来はすばらしいものになりました。国一番のスイート・コーン、おまけにキャベツはとびきりでした。」

——W. W. ライアン マニトバ州サウス・ジャンクション在住

母さんが言った：

耳はちゃんと洗ったかい？

でなきゃ、耳にキャベツが

生えちまうよ。

冬は終わりに近づいていた。

本当はこれが起こったことだった：

私たちはまぐわで庭をならしていた。
このことはしっかり覚えておくこと：
ぼくは馬の背に乗っていた。
馬はじっと立っていた。
でもぼくは落馬した。

雇い人は笑った：いったい
何でまた
じっとしてる馬から
落ちなきゃならんのだ？

ハツカダイコンの種を持ってきておくれ
と母さんは小声で言った。

1月の暗闇の中へ
種の目録が開花していく。

もし春が来るものなら
そのときは挿絵が満載の

冬の計画：

品番25——マッケンジー社特製ゴールデン・ワックス・ビーン改良種：
「特選豆。効果はそれ自体が報酬なり。違いのわかる園芸家たちから当店の種の品質と品揃えの豊富さに激賞の声が次々と寄せられています。」

ビーンズ ビーンズ

音楽の実：
食すごと
プップッと放つ効果あり

二本のくいの間に張った
結束機用の麻ひもで
母さんが一列目に印を付けていた。

雇い人は笑った：あやうく
このチビちゃんを植えてしまうところだった。
土をかぶせて何が実るか見てみるか。

父さんは笑っていなかった。
小麦と夏の休閒地に使う
4分の1区画にも満たない畑は
わずらわしいだけだったから。

出生地：メリディアン 北東17-42-16-西4番

出生地：アルバータ州ハイスラーの西1マイル半
補正道路を
3マイルほど南に下る

家の周りには
木はない。
風だけだ。
1月の雪だけだ。

日照りの夏だけだ。

出生地：

どうやって園芸家になるんだい？

テレフォン・ピー

ゴールデン・ジェム・キャロット

アーリー・スノーキャップ・カリフラワー

パーフェクション・グローブ・オニオン

ハバード・スクウォッシュ

アーリー・オハイオ・ポテト

実際はこんな風だった——母さんの通夜の日。これがひとつの事実なのだ——ワールド・シリーズが始まっていた。シンシナティ・レッズがデトロイト・タイガーズと戦っていた。雨が降っていた。墓地への道はかろうじて通れるほどだった。馬はじっと立っていた。ハツカダイコンを持ってきておくれと母さんが囁いた。

1977

「その名を唱えながら」³

ソネット 1

私の最初（いや2番目）の庭：

初源のもの： 無：

そこからのもの。

馴致されていないもの。

まずまず。はじめにしては

まずまず： 再度

庭から ここ アメリカ大陸 (の)

北から はじまりとしては

まずまず、雪のように

白い頁 そしてこの日々の

このいつもの： 来たれ 詩神よ

私に 私 (私の歌) に気づいておくれ：赤いつばさの

クロムクドリモドキが 沼地のそばに

(春の) 枯れたガマの上に

とまっていた

(抗え それに形を与えたいという

誘惑に 抗え

その誘惑に)

誕生日：1983年6月26日

そのスナップ写真の中で母さんは17歳のままだ。

母さんは誰も座っていない椅子のそばに立っている。

今日は私の56歳の誕生日だ。

私はその写真の中の空いた椅子に

腰かける。母さんは木造の家の壁にもたれて
立っている。その家の壁は
屋根板で葺かれている。母さんの右手、
その椅子の後ろに窓がある。

私はその家にいる、見えないところに隠れながら
私がまだ生まれていないことに母さんが気づかないように。
母さんの待ちこがれる目の中に私の目はある。
ほほえみかけた母さんの口元に私の口元がある。

窓は庭の木々の姿を
映している。私は庭で
遊んでいる。私はまだ母さんの息子ではない。

この詩の中で私は母さんの分身を演じる。
両手で母さんの写真を握る：
私は母さんに接近する恋人になる。

年をとったものだと

年をとってきたなと思う。母さんの夢を
よく見るようになったから。昨晚の夢の中で
母さんは家の裏手の
坂の向こうの畑にいた。母さんは立っていた。私は
豆のつるの中で遊んでいた。私たちは幸せだった。
でも夢の中の二人は動いてはいなかった。だから私は

遊んではいなかったかもしれない。私は豆を拾おうとしゃがんでいた。
一緒に摘んだ豆を母さんはエプロンで

抱えた。母さんはじっと立っていた。

母さんが私を見つめているのがわかった。母さんは
私が大きくなるのを見つめていた。たちの悪い雑草のよう伸びるわね
というのが母さんの口癖だった。母さんはきつとうれしかったのだ。

年をとってきたなと思う。でも今は幸せとは言えない。
穏やかな気持ちになったというのがほんとうのところだ。死は必ずしも
以前のような敵ではなくなった。今では私の監視役といったところだ。

死は忘れかけていて、ひょっこり現れる
友達みたいに思え始めた。昨夜の夢の中で
私は庭で遊んでいた。

その名を唱えながら

この詩の中では母さんは死んではない。

私の14歳の誕生日 あの10月の朝に

その電話はならない。

電話の中の聞き慣れない声は

アーサーを出してくれとは言わない。

雇い人たちも 物静かで気取らない隣の息子も

うちの畑近くのリヴァー・ヒルズからやって来た男も

振り返って

妙に時刻に力を置いて
母さんは10時に亡くなったとは言わない。妹と私は
互いに目を合わせはしない 微笑んだりもしない
ことばは偽りだと互いに（永遠に）
確信したから。

この詩の中で母さんは死んではいない
10月の食料保存の作業を終えて母さんは台所にいる。
私も冬支度を手伝っている。私はキュウリを洗う。
母さんがイノンドをとってきておくれという。
カモが渡っていく。
私は庭の門戸を閉じ忘れたままだ。

*イノンド セリ科。実、葉はピクルスの香料。

ソネット 5

ぼくの窓の

外の

暗闇

以外は

何も見えない

暗闇

何も

以外は

見えない

無だ

ぼくの窓の

外
暗闇
だけが

水
の形の

* 4分の1マイル区画 北アメリカ西部で使われる農業用地の広さの単位。1マイルの
4分の1四方。約160エーカー。

娘たちへのソネット

初秋のプレーリーの
沼地のことを思い出す
一晩中 暗闇の内側で
話し声のように鳴っていたカモたちのことを。

この詩の中で母さんは
窓際に立っている。私たちは
聴く。母さんは鳥たちの名を呼んでいる。

鳥たちが話をしている。
あの電話は鳴らない。
伝言もない。
欠いている人はいない。

マガモもオナガガモもそこにいる

闇の中に。

母さんは耳をそばだて 彼らの声を
聞き分ける。

初秋の沼地のカモたちも
移ろう季節の一部なのだ。

1985

ジョン・ニューラヴ
(John Newlove)

「父さんは溺死させていた」⁴

ぼくらの白い家の雨水桶の隅で父さんは
目の開かない子猫たちを沈めていた
ぼくはといえば一度しか会ったことのない
いや 見かけたことすらもない女性たちを思い浮かべ

詩や家族を作ってみたり 情事にふけったりもする
猫の悲鳴が聞こえないよう父さんは
袋の奥へと猫を押し込まなければならなかった
父さんはそれがいやだったのか

それとも愉しんでいたのかぼくにはわからない
厳格なその顔にどんな思いもよぎることはなかったから
ぼくも同じだとフロイトなら言うだろう

あの女性たちを詩の水底に沈めても

ぼくがその詩を読むときは
唇に感情ひとつ見せないからだ それは彼女たちを書き留める
ひとつのやり方にはちがいない でも父さんが
ぼくと同じ気持ちだったかどうかはわからない
だって ぼくはときどき殺める前に
彼女たちをそっと水面に浮かび上がらせて
ちょっとはキーキー泣かせてみせもするのだから
1963

「ヒッチハイカー」⁵

あの黒ずんだハイウェーに立ち
君はどこに行こうとしているのか――

木々の間の
アルバータ

道は左右へと
くねりながらのびている

あの評判のリゾートの
大きなコンクリートのアーチの中を――

そこで君は

風の道に立っていた

君の体を吹き抜ける
冷たい風 あてもなく

この国を
行き過ぎる君 ただ

辿り着いたある海で向きを変え
再び吹き返していくだけの

動く車の中で
見知らぬ人たちに守られて
1968

「どの地平からも」⁶

どの地平からも行けるんだ
見渡す限りの
どこからだって――

燃えるような小麦の色
濃い山吹色の野ガラシ畑
粗野な農夫たちの耕作地

そして川

少年たちが群がり遊ぶ
あの汚れた川 発電機の鼓動

安っぽいセメント造りの
低いダム 白色の湯が
たぎる岩場

雌牛たちや 強壯な雄牛たち
間断なく流れゆく
川幅の狭いプレーリーの水辺に

彼らが残した
泥水溢れる轍から

*

どの地平からも行けるんだ
見渡す限りの
どこからだって――

プレーリーの
夢想と歴史に点在する

骨の積み重ねに
(バッファローと鹿の

死んでしまったインディアン 死んでしまった入植者たち

不況時代の騒擾の中で

置き去りにされた

廃屋の骨組み

乾きはて 押し黙ったまま

それらは戻ってくるだろう

あの土地と精霊の中に

転移する土地

風化した空虚な心に――

ぼくは見たことがなかった！

写真や話の中でしか――

でも土埃に覆われた囲い

何ひとつ残されていない

荒れ果てた家) ――

寄り添う やつれた

農夫と妻

その小さな写真はここにある――

悲しげに微笑んで 望みはすべて奪われて

*

どの地平からも行けるんだ

見渡す限りの
どこからだって——
あの黒ずむプレーリーの
端を越えると

落っこちてしまうと君が思っていたように
日没に少年は

沈む太陽を眺めるのではなく
黒い大地を見つめている

果てはない 丸いのだ
と教わってはいても それには果てが

終末が 限界が 区切りがあるのだと思う——
ぼくらには数マイル先しか見えないものなのだと

*

どの地平からも行けるんだ
見渡す限りの
どこからだって——

暑い夜には
通りに町の人々が繰り出している——

男の子も女の子も

互いの気を引こうとする

男たちは 何やら話をしながら
若い娘に目をやっている

女たちも話している
そして互いに見合っている でもインディアンたちは
玉突きをする：打つ玉だけをじっと見つめて

*

どの地平からも行けるんだ
見渡す限りの
どこからだって――

あのいまいましい兵隊たち
カナダ騎馬警官隊が日を浴びて進軍する
自らの死を

遂行するクリー族：パウンドメーカーの姿が見える
寡黙で穏やかなビッグベアーが見えてくる
あいにくだけれど 清廉なだけでは

だめなのだ
法に背かぬことだけでは
だめなのだ――

ときには生を受けたことだけで十分で
阻もうとするなんて
出過ぎたことなのだ——

オッター大佐 ミドルトン少将とか言う連中が
君たちをやっつけにくるぞ
君たち——

インディアンを。あんなところにいるくらいなら
すぐさまここで死んだ方がましだ
などと言ってもむだなのだ

君たちの方が深くこの土地を愛していても
彼らが連れて行く場所にいずれは行かされることになるのだから

*

どの地平からも行けるんだ
見渡す限りの

どこからだって——
でもそれは

プレーリーからとは限らない
商業に 空虚を満たそうと
欲情するあの商業主義に

吹き払われた
都市の冷たい魂からかもしれない

通りには人ばかり

夜に明かりは
灯されて 風は

吹くところまでは吹いていくけれど
通りは暗く 人でいっぱいだ

見つめ合うこともなく 彼らの視線は
届く距離に固定される――

山々を背に遮るように聳え立つ
あのコンクリートの地平線に
夢想は視界の範囲に閉ざされて

1968

* パウンドメーカー (Poundmaker, 1842?-1886) 平原州インディアン Pitikwanapiwiyin のこと。白人との協定事項が履行されない中、クリー族、ストーニー族などをまとめ平和的解決のために交渉を続けた。ミドルトン少将に降伏した後、反逆罪に問われる。釈放後、特別保留地で病死。

* ビッグベアー (Big Bear, 1825?-1888) 平原州インディアン Mistahimaskwa のこと。パウンドメーカーと同じように白人との平和的協定の道を探ったが反逆罪に問われ服役。特別保留地で死亡。

* オッター大佐 (William Dillon Otter, 1843-1929) カナダ北西部のインディアン制圧に携わる。パウンドメーカーの野営地攻撃、ビッグベアー捕囚の戦略は失敗したが、

南アフリカ戦争などで軍績を重ね、後年爵位を与えられた。

*ミドルトン少将 (Sir Frederick Dobson Middleton, 1825-1898) ルイス・リエル (メティス反乱軍の指導者で、のちに絞首刑に処される) を捕らえ、パウンドメーカー率いるインディアンを降伏させるなどカナダ西部のレジスタンス鎮圧の軍功により報奨金、後には爵位を与えられた。

「ドゥホボル」⁷

君に死が訪れる 風雨に刻まれた体は
台所の粗いテーブルの上に横たわる

君の家の青い木壁に風が吹きつけている
しかし世紀の変わり目の頃

ロシアを離れた農夫が死に
戦争の足元についてその身を横たえたとき

君が今まで目にしたものを
代ってだれが語るができるだろうか

君たちに向かって鞭を振り上げ乗り込んできた
ツアーの騎馬隊

火砲のように放たれる小銃のありさまや
長い航海 受け継いできた故国の奇異な習慣のこと

君たちの名を見慣れない文字に変え 店々に貼りつけさせた役人たち
君の知らない言葉で話してはいたけれど

サスカチュウワンの冬のぬかるみから
馬車を引き上げてくれた

褐色の肌の礼儀正しい人々のこと
約束の地を求めて土地を拓き

村々を作り上げていったとき
戦場から帰還したイギリス人たちは

得意げに互いの手柄を語り合った
そのときの君の思いをだれが代って伝えるのか

殺戮を拒絶し 流血を認めない心
君は今 冬のようにこわばり横たわる

牛のように押し黙り もう愛することもできぬまま
女たちが啜り泣き 弔問の客に茶を差し出しているときに

1970

*ドゥホボル 霊の戦士、ドゥホボル。18世紀後半南ロシアの無政府主義的・無教會的な分派のキリスト教徒。19世紀末に大半がカナダに移住。

「機関車と海」⁸

町はずれには置き忘れられた黒い機関車がある　それが放つ子どもの角笛
のような音が起伏のない土地に響き渡り　暗い建物の壁面を伝っていくと
水際の霧笛が呼び返す。

その音に挟まれて人間たちは家の中でじっとしている
エジソンの光の中で機械が伝える知らせを見つめながら。
沼地では不気味な生き物たちの奏でる音楽が...

脚の長い昆虫が水面を走る　蛙たちが待つ　魚も　狙う鳥たちも。
都会では人間たちが知らせを待っている。彼らは機関車と魚たちの間で

じっとしている。平らな海とかつては海の広がっていたプレーリー　彼ら
はそこに包まれている。眼前に浮かぶイメージ

演じる男や女たち

歓びのない快樂と生から売却された時間に歪み
破碎したところを抱いたまま　客をもてなし　正確に踊り続けながら。

機関車がブーンと音を立てるとプレーリーもブーンと唸る。
蛙たちがその長い舌で虫に触れる　食らいつく魚　ついでに鳥たちも

待っている。

無数の獣たちの目の前を夜の挙動が瞬時によぎる。鼠が走る。
その夜はかすかに雨が降る。

蛙たちが声をひそめている。機関車と海の間灯りが消える。
人々は機械の夢を見て眠り 海は雨を受けてざわめき立つ
機関車は黒々と輝いている 魚はピンク色の水たまりの下で待つ。

蛙たちは寒さに震える。この土地は待っている 黒々と ほうけたように。
人間たちは干上がったまま寝床に横たわる。

歴史よ！歴史よ！

閉じた瞼の下で彼らの眼球が前に後に動いている
欲望のおぞましい形を追い求めて。

1970

「温かい風」⁹

湿った太陽の光りが春のぬかるみに注ぐと
生温かい風が吹く 両手が受けとめる季節に満ち足りて
ぼくは歩く

でも世界に終わりが訪れて
ぼくらが舗道に滲む影のように
貼り付けられてしまうとしたら？ けれど

今日はきみとともにいる
もう一度ぼくを人間に戻してくれる幸せを抱いて
1970

「夢」¹⁰

蜂はこの寒さでは飛ばないだろう
華氏60度は必要なのだ

羽根が凍えてしまうから。雪の辺境100マイルの彼方で
ヨーロッパミツバチが

土着の蜂を脅かす。彼らは知っている、
奴らは前進してくると。たとえ羽根が凍りついたとしても。

冬 一人のインディアンが
雪原を重い足取りで動いている

ひと口分の 蜜を求めて。

1972

「車を走らせながら」¹¹

君の手紙に特別何も書かれてはいない。ただ
雪の中を一晩中 誰かの車を

走らせていたこと　そして
ヒーターが故障して凍えそうになったことを除いては。
でもぼくにはわかっている。ぼくもまたこの国に住んでいるのだから。
月明かりの下に吹きだまる白い雪の夜が
どれほど美しいかはわかっている。

黒い木々や絡み合った藪のまわりに車を走らせることが
どんなに寂しく　すてきなことなのか
全くもって。そのとき君はこの国そのものになる。
一人　雪の水路に君はいる
松林はどこまでも続いていくだろう
樹林と雪が滑るように後方へ流れていこうとも
車を走らせ　あるいは止めて　歩き　座りこんでしまおうと。

この土地は待っている。目を凝らして見つめている。
心地よい都会を出ると　ほくらの国はなんと荒寥とすばらしいものか
何と人間にふさわしいものなのかと。君は車を走らせていたと言う。
それはどうでもかまわない。
今ぼくに見えるのは滑走するひんやりと冷たい車だけ
閉ざされて　なめらかな君の顔　空っぽで安らかな君の心
ペダルを踏む冷たい足　ハンドルを握る冷たい両手だけなのだから。

1986

アンドリュー・スクナスキイ
(Andrew Suknaski)

「トニータ牧場のはずれのインディアン住居跡」¹² より

1

春を伝える

マキバドリの鳴き声

ウッド・マウンテンの草炭地の泉から緩やかに水は流れ

北へ走る12マイルの河流になる

そこは子どもの頃に釣りをし泳いだところ

でもあの環状の石の跡には気づかずに

なぜなら30年代にリー・ソプラノの父親が

家族が食いつなぐために拓いた畑から舞う土埃のせいで

それはほとんど隠れてしまっていたのだから

でも彼の土地の大きな中央の環 そして

金網の巻きつけられた一個の石が

ぼくの村へと北に西へと走る柵柱を繋ぎ止めているように

ぼくの心を

ぐるりと支えている何か——これらのものすべて

四方を配し

彼方へ広がり 移りゆくこの祖先からの空間こそ

ぼくのものだ

彼らが生きた

血と挫折の地理学の中に

この広漠とした平原の意味を

記録に留めること それがぼくに与えられたことなのだと

1976

*ウッド・マウンテン モンタナ州の国境、サスカチュワン州南西部に位置する丘陵地帯。スクナスキの両親が入植した土地。

「フィリップ・ウェル」¹³

プレーリーに春が訪れる
ぼくは一台の輪金取付機の前に立つ
たった一本のボルトに支えられた二台の巨大な万力の前に
(プレーリーの男たちはそれを使って木製の車輪の修理ができ
おまけにその腕が確かなら
それはありがたがったものだった)

今ここに立って
フィリップのことを思う
ウッド・マウンテンのはずれ カビくさい彼の掘建て小屋で今朝
ダנק・マクファーソンに発見された彼のことを――
愛用の錆びたライフルの傍らで静かに倒れていたフィリップ・ウェル

ぼくは村人たちに聞いてみる この男はだれなのか？
ぼくらのもとを去っていったこの男は？

1914年

フィリップと父さんはムース・ジョーから南へ歩いた
入植地を見つけるために

干し草の中で眠り
焼死しかけたりもした
キーキー鳴くネズミたち その断末魔の喚き声に起こされて
命からがら逃げ出した——
ある開拓農民が二人をこらしめようと
マッチで火を放ったのだ

ウェルと父さんは山腹にねぐらを定め
冬には火をおこしては集めた石を温めた
しとめた獣の皮をなめし 毛皮で外衣を作った
穴倉に赤熱の石を投げ入れて
それを柳の葉で覆っては
獣皮にくるまり眠っていた

父さんはぼくに一枚の写真を見せてくれたことがある
ひとつなぎの鍬を引く9頭の黒い馬
フィリップは得意顔で手綱を引いていた（家を持つために土地を掘り起こしていたのだった）
物静かで穏やかなウェルが愛したものは
馬と木だ 耕作地の土が吹き流され始めると
小屋の周りにポプラを植えた
不況の時代には輪金取付機を手に入れて
車輪を直し 皮をなめし 村人の馬具の修繕をした

そしてのちに（老いて病気がちになり）
ウッド・マウンテンに越してきた
必要なときに医者の方へ連れて行ってくれるような人間が

いつでも傍にいるように

ウェルが命を絶った今日
ジム・ホイのカフェでコーヒーを飲む村人の顔は
すっかりいつもと違っていた
ウェルに好きな女性がいたかどうかは誰も知らない
あるクリスマスにモンタナ近くの国境で
スクールダンスがあったときのことを覚えている人はいたけれど——
みんなが踊っていたときに
酔っぱらって隅のベンチで眠っていたウェル
あのキスのあとのユダよりも心寂しいウェル
（それは車軸が支えきれなくなって
すべてが砕けてしまうまで
鉄輪が頭の周りを締めつけるような
こころの奥の深い悲しみ）

1976

「アーニー・ハドソン」¹⁴

アーニー・ハドソン

第1次大戦の退役軍人　でもウッド・マウンテンに帰郷してからは
南の古い交易所まで郵便物を届けていた
30年代のときブリザードに襲われて
転覆したそりの下に釘付けされたことがある　馬たちが
その場に佇む間　彼は何とか生き延びた——明け方　助けがやって来たが

凍傷に罹った右足は切断された
そのとき彼の中で何かが失われた

子どもの頃のぼくにとって
彼はプルーロック（旧約の預言者の）みたいな人だった
松葉杖を引きながら南へ向かう道でいつもビール瓶を集めてはいたけれど
ぼくはといえば北と西の二つの道に決めていた——
ダンスパーティーの翌朝早くに
空き瓶を探していると
一陣の風に
砂塵が本通りに舞うのを見た（一瞬消えたアーニーは不思議なことに
ブローニンの店に再び姿を現した
大気を歩く亡霊のアーニー）

最初の卒中で倒れたとき
アーニーは80歳だった
退院するまではぼくが代わりに
レジャイナ・リーダー・ポストやフライデー・メール・ナイトを
ジム・ホイの店で売ったものだ
その頃 もう一度アーニーの中で何かが変化した——
穏やかになった彼は教会に通い始めた
体の弱い妻と
のちにはウッド・マウンテンの郵便局長と

1年後彼は洗礼を受けた
名付け親になったのは14歳のぼくだった

1976

「ヴァンクーヴァー行き夜行バス」¹⁵

キッキング・ホース峠へと

下る道

再び大きくカーブするときに

うとうとしながら運転手はバスを走らせる――

ぼくはミラーに映る

睡魔と戦う運転手を見つめているけれど

怖くはない

ぼくはすべて身を任せていたのだし

メディスン・ハットを過ぎたあたりから

夢とうつつの境はとうに薄れていたのだから

後部座席の農夫が笑う

30年代に死んだ二人の兄弟に

聞き取れない言葉で

何かをぶつぶつ語りかけながら――

彼の前に坐っているヒッピーのカップルは

なかなか寝つけない

エデンの園へと向かうはずのこの苛酷なハイウェイの旅に

何度も目が覚めてしまうから

ぼくの横には形容できないほどに

痩せて老いた男が坐っている

彼もまた眠りに誘われている

手の中に煙るたばこが

スローモーションのように落ち

彼の膝に支えられると
一瞬服に点火する
（すると納屋ツバメより早く
もう片方の手が
消し止める——
でもまた別のたばこに火をつける
そして咳こみながら再び眠りに落ちていく
ぼくらのバスが風を散らし 峡谷を下り
ゴールデンへと向かうとき）

次の日ヴァンクーヴァーで
ぼくは新聞を買い 住む場所を探す
ようやくウェストエンドに部屋を見つける
（家主が言うには
清潔で
広くて
壁は張りかえられたばかりだし
家賃もたったの月55ドルだと——
でももう一度見回してみると
気がついてくる
最近塗りかえられた天井と窓枠
ベッドの横のフロアには
吸い殻の
いくつもの焼け跡が）

荷を解くには疲れすぎていて
カーテンを引き横になり

少しの間眠ろうとする——
壁と暗闇に包まれて いつしか
夢の中を漂っていく…
するとベッドの端に浮かび上がる炎の向こうに
プレーリーの笑う狂人の顔がおぼろげに現れてくる
1976

「マニトバ州トルストイ村の西（1900年頃）」¹⁶

母語とスラムに監禁された
若いウクライナ移民の物語
彼の名は忘れられた
でもアスィニボイアの老婆が
記憶を辿り 話し始める
故国の家と同じように
脱色した藁と泥を塗り固めた
草葺き屋根の小屋が点在する
マニトバの田舎の小さなウクライナ人の村
そのトルストイ村の友人からの手紙だけを携えて
モントリオールで寂しい冬を越し続けた彼のことを

老婆の他に彼のことを知っている人たちも
彼がポケットに数ドルの小銭しか持たず
いったい幾たびの春を 徒歩で
モントリオールをあとにしたのかは覚えていない
地図で場所を確かめながら

途中の駅で立ち止まり
どのように線路づたいに西へと向かっていったのかもわからない
ときには駅員からの
食料と寝所の施しに助けられ
またあるときは彼の言葉を理解しようとはせずに
東方行きの列車で送り返そうとした
駅の官吏の嫌がらせを受けて

その若者がいつもどこまで辿り着けたのか知る人はいない
ある年 オンタリオ中央部のある駅で
数人のウクライナ移民に彼が会うときまでは
「どうか一緒に連れていってくれられないか
もう二度と
イギリス人とは
話はしたくないのだから」
彼らの一人にしがみつきながら
身の上話をしたというその日までは
1981

*アスキニボイア 先住民の言葉に由来する地名。現在のサスカチュワン州にまたがる
一帯を指す。

「踏切——ラッセル・マロアを偲んで」¹⁷

「我々は突然にして運命にぶち当たるのではない。のちに処刑されることになる人
間は常に——つまり仕事に向かう途中、電線を見るたびごと、踏切を渡るたびご

とに——処刑場のイメージを心に描き、いつしかそのイメージになじんでいくものなの
のだ。」

——ユキオ ミシマ

「彼は生きるのには疲れ果てていた——だから電柱にのぼったのだわ」と彼女が言
った。

——ラッセル・マロア『電柱』

こことは違う場所

別の生 そして

自身の痛みを

知ることによって

痛みに惹かれる気質というものを

つきとめたいという

あの切なる思い

ニューラヴのカムサック

ウーアのスイフト・カレント

そして若きマロアのシェルブルック通り

子どもの頃に

歩いた

あの長くうら寂しい線路を辿りながら

私たちは知る

ついに思い至るのだ

最初のキスが

すべてを明らかにする

学校から

家に帰ってきたときの

最初のキス

あの死の味わい

遠い峡谷で

春になって
あらわになる
迷い馬たちの
風が運ぶ
初めての死のにおいを

オンタリオ
ポート・ホープの近く
ある肌寒い10月の夜
ラッセル 君は
有刺鉄線の張りめぐらされた塀沿いを
ひとり歩いていく

カエデとポプラの葉は
新雪の下で
皮の押し葉のようだ
そこには
君の世代が夢見たものが
ぼんやりと姿を現している...

でも夜の空高く
風は何のにおいも運んではこない
満月が
ほっそりとした
銀の雲のたてがみに浮んでいる
大気に漂う細水が
月の光に煌めく
もはや君の口から聞くことはない
ある決断へと
最後の思いを

押しやりながら
思考によっては知り得ない

真実を

確かめることだけに

向けられた

心と

からだ

ラッセル

... あの電柱の影に
立ち尽くす私たちに向かって
永遠に

列車は

驀進し続ける

柱に残された

三つの

血糊

乾くことはない

1982

- * ラッセル・マロア (Russell Marois, 1945-1971)。ケベック州シャープブルック市 (Sherbrooke) 生まれの作家。60年代末モントリオールにおけるロストジェネレーションの生を描いた小説『電柱』*The Telephone Pole*を残した。冒頭の引用は本文87頁から。作品とマロア自身の自殺との関連は不明。
- * カムサック (Kamsack)。詩人ジョン・ニューラヴの育ったサスカチュワン州の小村。
- * スィフト・カレント (Swift Current)。詩人ウーハー (ローナ)・クロウツィアーの生まれ育ったサスカチュワン州の町。
- * シェルブルック (Sherbrooke) 通り。モントリオール市にある通り。

ローナ・クロウツィアー
(Lorna Crozier)

「アビの歌」¹⁸

アビは声を残して
飛び去った
曙の光の中で私はそれを聞く
眠りに落ちる直前に
葦の群落を抜け 岸辺へ向かっていくときに

アビは湖に
ときには私の中に棲む
でも今は
記憶のように闇を動く
あのニジマスの腹の中でじっとしている
もし自分を空っぽにできたなら
そして すべての感覚を5つの白いカップのように
君のまわりに並べることができたなら
アビはそのひとつに巣を作りもするだろう

そのとき君は鳥たちだけが知る遠い広がりや
長く暗い喉から立ち上る
あの孤独も感じることもできるだろう
声に倦んでアビが飛び去ってしまう前の

1985

「野ガン」¹⁹

幾世紀も
辿ってきた道を
野ガンは飛ぶ

そこには深い慰めがある
若い頃に母が
耳をそばだてたガンと
同じではないのだけれど

たぶん私が最初に聞いたのは
彼女の胎内だったはず
母は彼らの翼で
月が陰るのを見つめていた 彼らの呼ぶ声
最初の音——
子宮の中の柔らかな
水性のささやきとは別の音

だから私の悲しみは
幾世代も伝えられてきた母の悲しみ
安らぎの地を求めての
距離と方位と
遠い憧れのような

1985

「雪の天使たち」²⁰

この冷たい国の天使たちは
みんな雪でできている
だれも口に出しては言わないけれど

男たちは秘密にしている
車のライトにさっと横切る
あの長い髪に魅せられたときのこと
女たちも話はしない
天使たちのあの手のことは——それがどんなに大きく
ごっごっしていたかなんて まるで彼らも子どもを育て
種をまき 井戸から水を運ぶみたいに

一年で一番長い季節に
彼らはこの国で暮らしている
納屋や倉庫のまわり 刈り株畑の中や
氷結した川の下に

庭の灯りが
闇を二つに切り裂く夜に
凍りついた窓ガラス越しに
体をすり寄せ 入りたさそうな
彼らの姿が見えるときがある
そんなときはだれも一人でいたいとは思わない
冷たい翼の気配を感じてしまうから
たとえその歌声が

彼らの放つ光りに盲い
鎖を引いて回り続ける犬たちの
声を奪うほどに美しくとも
1985

「夜の庭」²¹

濃い影となって
葉は庭に溢れている
ヒョウタンの実が夜の潮溜まりに
クラゲのように浮かんでいる

遠く海を離れて
植物だけが知る
この暗闇

ミミズでさえも
この漆黒の片隅で
光りの糸を引いている
その眠たげな目で
1985

「キャロット」²²

人参は大地に
ファックしているんだ
永遠に勃起したままで
湿った暗がりをもさらに深く押し進みながら
夏中ずっと
相手を飲ませようと躍起になっている
よかったかい
よかっただろ？

たぶん大地が声を返さないものだから
彼らは止めるすべを知らないのだ
みんながキャロット・ケーキや
ビーフシチューに入れる人参や玉葱のこと
カラメルソースを添えたキャロット・プディングのことを考えながら
庭をぶらぶら歩いているけれど
午後の暑さが極まる頃に
彼らはひたすらファックに精を出している

「ジャガイモ」²³

ジャガイモたちが何をしているかなんて
誰も知らない
静かに隠し立てをしているかのように
ぴったりと身を寄せ合っている

一つ屋根の下にそんなにもたくさん集まっているものだから
近親相姦だという噂があるくらい

青白く 口をつぐんだいくつもの顔

うつろな表情

ジャガイモ団子

ジャガイモのパンケーキ

ポテトヘッド
おたんこなす

暗い地下倉で

大箱の向こう側にその根を伸ばし

ジャガイモたちは結び合う

その痩せた白い腕で

1985

「ズキーニ」²⁴

ズキーニはサヤエンドウの蔓の

ほっそりとした腰を撫でると

黄色いインゲン豆のスカートを覗きこみ

肩をいからせ 一人分の場所しかないぜと

食用ダイオウにすごんでいる

でも本来は内気なたちで

斑模様のトカゲ膚

静かに寝そべっているだけののぞき魔といったところ

秘かに影をまとい
ブドウ汁のように庭に広がって
ズキーニの両眼は夜通し見開いたままだ
1985

「パンを焼く人」²⁵

街の灯から遠く離れた
雪の静寂の中で
パン職人はパンを焼く
星空の下で
長いスモックをまとい
大きくなりすぎたパンの塊のような
山高の帽子をかぶり
顔も手も
口や目のまわりも
小麦粉だらけになって

白く覆われているせいで
彼の姿を見ることはない
たとえあなたが家並みを過ぎ
雪闇の中へ
幼い頃の記憶のにおいへと歩んでも

しかし 彼は焼き続ける
パン生地を打ち 形を整えながら

どのパンの塊にも幅の広い親指と
残りの指で誰かの名を記していく
それはあなたの父の
それとも母の名前かもしれない
その名が聞こえてくることはない
口の中でそれを味わうこともない
それほど寡黙なものは他にないから

あなたがいつもの床で眠りについているときに
雪原に注ぐ星明かりの下
彼は焼き続ける
やがてその手で作られた
何列ものパンの塊が命をふきかえし
だれかの弔いの日のもてなしのために
パンがちぎられたとき その香りが
あなたのまわりに広がっていく
その瞬間のために
1992

「第7日目に」²⁶

最初の日には神は命じた
光りあれ と
すると光りがあった
二日目に
神は命じた 光りあれ と

するとまたしても光りがあった

何をしているの あなた

光りは昨日お創りになったでしょ

ぼんやりしがちな人だと知っている妻が言った

そうだったな

じゃあ、どうしたらよかろうと神は聞いた

別に、

でもしっかりして下さいね

妻はそう言うと

やれやれといった様子で

出ていった

埃は見あたらないけれど 茫洋とした天上の部屋で

いつもの家事を済ましてしまうために

3日目にも神は命じた

光りあれ と。

さらに4日、5日目も

(姑を訪ねて妻は家を空けていた)

彼女が家に戻ったとき

残っていたのは6日目だけだった

光りは目が眩むほどに強烈で

神はそれを支えるための空を

広げなければならなかった

すると今度は空がすべてを埋め尽くすことになってしまった――

神の想像を越えるほどに
空は膨張していった
さあ早く
立ってられる場所を創って下さいな！ と妻は言った
大地あれ！ と神は叫んだ
すると薄っぺらなひとすじの表土が現れた
空に小突かれ
全世界の青を背にして轢死した蛇のような

7日目にはいつもそうするように
神は休息をとっていた
でも休息というのは
正確なことばではないと
彼の妻は認めなくてはならない
なぜなら7日目には神は
書齋に向かい
日記に記すという仕事に取り組んでいたのだから
巨大な渦巻き形や輪の形
大きな十字形の巧みな書体で
あらゆる事実を書きかえながら
もちろん男の肋骨から女が創られたという件ですらも！
でもそんなに心配するほどのことでもないと思はる
そもそもそんなことを信じる人がいるのかしら？

ともかく彼女には仕事が残っていた
あと一日だけで
彼が忘れていたものを

すべて創り出さねばならなかったから
葉の一枚一枚
獣たちの一足一足 つがいや夫婦の組み合わせ
今や
当初の計画通り
死を免れるものはなくなった
増えて地に満ちよ
彼女がそう言わなければならなかった
でも 果てしなく
どこまでも どこまでも光りは広がっていて
生命のための場所はほとんどなかった
広大なプレーリーの空の下
ひと鍬分ほどの厚みもない大地の上には
1992

「その馬の簡潔な歴史」²⁷

1

まどろみの牧場で草をはむ栗毛の雌馬の体には
兵士たちが詰まっている。
それぞれの心の片隅に
暗がりと絶望を宿したままの。
彼女が夜の牧場を駆け抜けるとき
兵士たちは馬の腹の揺れを感じる。
彼らは牧草と忘却のにおいの漂う船倉にいる
と思いこんでいる。

もっともひっそりと馬が佇む静かな時間や
彼女の両耳を襲うハエのざわつきが一体何かは知る由もないけれど。
兵士たちはそれぞれが斃れ伏した戦場から遠く離れ
両腿の白い傷痕をくぐり抜けてきたときのことを思い出す。
でもそれがどの国のことだったのか
いつ頃のことだったのかは覚えてはいない。
でもともかく今は水夫となって雲海を渡り
20世紀が終わろうとするこの緑の牧場に辿り着いたのだ
そして誰かがその馬を導き入れようと錠前をはずし
彼女の肋骨の扉を開き 兵士の骨の間に
光りを射し入れたのだろう。

2

農場の仕事を終えた後
その馬に跨る娘には
そこに兵士たちが潜むとは思ってもかけない。

もし知っていたのなら その馬の脇腹を
そんなにきつく腿で締めつけることはないだろう。
そんなにもしっかりと跨ることもないだろう。

ときおり
彼女が馬の首に頬をよせるとき
いく人もの声が
聞こえるように思うことがある。
そんなときはいやな夢を見る。

すでに都会を懂れて
彼女は馬には飽いていた。
手や内股に
しみこむ
野生のにおいにも。

馬にブラシをかけ
泡汗を拭うとき
それが溺死人が
揺れ動く
波間から生じた
泡なのか

それとも 溺死の男の口から溢れた唾なのか
彼女にはわからない。

3

翼のないその馬は
穏やかに牧場で草をはんでいる。
馬には不滅も
はみも馬勒もいらぬ。

蹄の確かな感覚の他に
彼女が何を知っているのかは
誰にもわからない。

私たちがその馬を船と呼び

悪夢と呼び
歴史と呼ぼうとも
彼女はかまわない。

望むままに
彼女は動き
尾でハエを打ち払い
口をむき出し
黄色い歯を見せる。

望むままに
彼女は
絶対の静けさに立つ。

1992

あとがき

本訳詩集は前号に続き英語系カナダ詩の作品を訳出する試みである。今回取り上げた四人はいずれもサスカチュワン、アルバータなどのカナダ西部平原（プレーリー）州出身の詩人である。近年プレーリー詩はカナダ詩の一つの潮流となっているが、彼らはその中心的役割を果たしてきた詩人たちである。現在は必ずしも全員がプレーリー州で活動しているわけではないが、彼らにとってプレーリー世界は常に内面の原郷として存在してきた。果てしない地平と聳え立つ大空、先住民の征圧や辺境の移民社会の出現と衰退、あるいは野生動物や平原に吹き渡る風、巻き上がる砂塵、苛酷な冬と静寂というようなプレーリーに対して私たちが一般に抱く空間的・歴史的・風土的想念が濃淡の違いこそあれ、彼らの詩的想像力の源泉となっ

てきたのである。勿論、個々の作品を眺めると、彼らとプレーリーとの関わりは、それぞれの私的な体験に基づくきわめて個性的なものであったことも明らかである。また当然のことながらプレーリー体験を直接的背景としない作品も数多い。しかし、今回のようにプレーリー詩としてアンソロジーなどに収録されてきた作品を眺めてみると、彼らの詩に共通する特色や指向が見られるのも事実である。とりわけ60年代から70年代にかけて重要な詩集を上梓したニューラブ、スクナスキ、クロウチにはプレーリーの詩人であるという意識が特に強く感じられる。ここではプレーリー詩の成立の背景や主に上記の三人とプレーリーとの関わりなどについて若干ふれたあと、個々の詩人の履歴や作品の内容等について付言したい。

リアリズムを中心とした小説の伝統が優勢であった平原州にプレーリー詩が開花し始めるのは比較的最近のことである。それ以前に詩の歴史が存在しなかったわけではないが、旧大陸の価値観を自然・風土も全く異なる辺境の地に焼き写しそうとしただけの初期の詩から、借り物ではない言葉でプレーリーにおける自らの体験を語るようになるのはニューラブやイーライ・マンデル (Eli Mandel) らを先鞭とする1960年代から70年代にかけての一群の詩人たちの出現による。彼らの詩を突き動かしていたものは、自分たちは何者かという問いに対するひとつの返答としての「土地に対する誇り」 ('a local pride') という感情であった。その淵源は『パターソン』 *Paterson* の詩人 W. C. ウィリアムズに、また、より直接的な刺激はオンタリオ州南西部のロイヤリストの伝統が残る僻村から詩を発信し続けた詩人アル・パーディ (Al Purdy) に辿ることもできる。勿論、その「誇り」にはそれぞれの詩人の土地に対するアンビバレントな感情も渦巻いてはいる。しかし、彼らにとって「土地に誇りを持つこと」とは地理的・歴史的にもその存在すら認知されていなかった辺境の土地、「名付けられていない土地」を、まずもって想像力によって回復することを意味した。それは、スクナスキの作品に見られるような創造的ルポルタージュとでも言うべき

方法、あるいはクロウチのように記憶の中の出来事を逐一命名し、改名し続ける営みにせよ、その作業を通して拠って立つべき場所を検証していくことであった。

詩人は多かれ少なかれある特定の場所を何らかの隠喩、物語、あるいは神話として捉えると言われる。しかし、60年代以降、このような「場所に対する意識」の高揚が見られるようになった背景には彼らを取り巻くプレーリー社会の急速な変貌がある。ジョージ・ウッドコック (George Woodcock) が述べるように、60年代とは国土開発や農業政策によって、多くのプレーリー小説に郷愁をもって描かれたような地域社会の構造が根底から変質していく時代であった (Woodcock, 6)。確かにプレーリーに典型的な田園風景や村のたたずまいは消え去り、すでに記憶の中の存在になりつつあった。このように過去が死滅しかけた社会を目の当たりにして、自己の居場所を再確認することが彼らの急務として意識されたのである。また、60年から70年代にかけては、カナダという国全体が自国の文化の独自性を模索していた時代である。プレーリー詩における土地に対する意識の目覚めはそうした動きに呼応するものでもあった。

そうした意識は地理的・風土的な関わりと同時に歴史への関心、また歴史に対する新たな認識を促した。もっとも過去に向かい合う態度は個々の詩人によって違いが見られる。例えばクロウチは記憶そのものに対して自省的であり、過去を新たに創出する過程の方により強い関心が示されるのに対し、スクナスキの場合はその土地の歴史や伝承によって培われた共同体意識の発掘に重きが置かれている。しかしながら、時間を軸として自らの起源が明らかにされない限り、自己は不在のままなのだと感じる点では彼らは共通の心理的基盤に立っていた。ニューラヴは、正典とされてきた歴史ではなく、自分たちの土地そのものが語る歴史の再創造に目を向ける。それは身近な家族や入植者たち、先住民たちを通しての歴史の読み直しであるとともに、新たな神話の生成を意味した。そこには社会の流動や価値

観の転変の中で何か重大なものを喪失しつつあるという感覚が顕著である。スクナスキは「風が渡るとき／ぼくはここに立ち止まり／祖先の声に耳をそばだてる」(*Wood Mountain*, 79) と書き、遺失したものを聴きとろうとする。彼にとって「祖先の声」とは単に貧しい移住者や先住民たちの声でだけではない。それは土地そのものに内在する遠い記憶の声、野生動物はもとより、草木、石や風すらからも発せられる地霊の響きとも言うべきものである。

しかし、土地や風景そのものに彫り込まれた歴史を読み解くことによって、彼らは自身の居場所を確たるものとしえたのだろうか。また、「場所」を掘り起こすことによって、自己の起源を捜し求める彼らの渇きは癒えたのかという問いに対しては一律な答えを与えることはできない。先に述べたようにクロウチにおいては、問い続けるというその行為自体に意味が見出され、起源は永遠に延期され、不確実なままである。ニューラヴの場合は歴史的事実を探索しつつも、それは常に暫定的であり、懐疑の念からは逃れられない。スクナスキといえども「場所」に対する感情には振幅がある。彼にとって地霊のそよぎであるはずの風は底知れない孤絶感をもたらし、苛酷な自然を前にした矮小な人間を狂気に駆り立てる恐ろしい風ともなる (*Spak, Wood, Film*)。70年代の初頭にマーガレット・アトウッド (*Margaret Atwood*) が記した「この空間は聞いてくれない」、「流れる水は私の影を／映してくれない」(『スザナ・ムーディーの日記』、12、13) という詩句はカナダ人の根底にある感情を探照したものとしてしばしば引用される。土地の声に耳をそばだて、プレーリーの広漠とした空間と沈黙に拮抗しうることばを探り続けてきた今回の詩人たちも、アトウッドが描くカナダ特有の環境世界と自己との不安定でよそよそしい関係のありようと切り離して考えることはできないのかもしれない。

ロバート・クロウチ (*Robert Kroetsch*, 1927-) はアルバータ州ハイスラー (*Heisler*) に生まれた。アルバータ州立大学卒業後、カナダ北部

の各地で作業労働者として働き、その後米国アイオワ大学院で学んだ。1970年代後半までニューヨークに移り住んだ後、カナダに戻りマニトバ大学で教鞭をとった。カナダを代表するポストモダン作家として、また脱構築批評等の理論家としても知られる。小説家としては、語られた出来事に神話的・文学的類推を重ね合わせるモダニズムの手法をプレーリーの生活世界に援用した作品などがあり、『種馬男』*The Studhorse Man* (1969) でカナダ総督文学賞を受賞した。60年代から小説と平行して詩作を行ってきたが、重要な詩人として注目されるようになったのは70年代に入ってからである。小説や批評理論における解釈不可能性の立場は今回の詩作品にも貫かれており、「石槌の詩」は詩集『实地観察全記録』*Complete Field Notes*の序詩として掲載され、彼の詩精神や詩法を例示する作品と言われる。彼にとって石の本質はそれ自体不可知のものだが、その来歴を辿ればさまざまな用途（意味）が付与されてきたことがわかる。詩人は石に担わされた一つ一つの神話の解体・再構築という作業を続け、知ることの不可能性へ、初源の混沌へと立ち戻る。詩人にとっての机上の石は、書かれる詩と同様に神秘そのものなのである。「種の目録」では、プレーリーにおける私的な記憶に幾重にも書き込みが加えられ、断片の併置、反復、置換と肉声の挿入によって、過去は追想されるのではなく、むしろ重層的に創造されるべきものとなっている。「その名を唱えながら」の一連の作品では、詩人は無意識下に押し込めてきた母に対する思いや欲動を語り始める。「母さんの夢を／見るようになった」詩人はその長きに亘る沈黙の時間を受け入れながら、その夢の意味をさまざまに省察する。「ソネット5」の「水の形の」暗闇は母の体内へのつながりを、また次に添えられた「娘へのソネット」には母・詩人・娘という時間の連続性に対する感慨が語られる。どの詩にもプレーリー世界を背景にクロウチの私的な神話世界が創り上げられている。

ジョン・ニューラヴ (John Newlove, 1938-) は、サスカチュワン州

レジャイナに生まれ、ロシア系入植者の多い州の東部地域で少年期を過ごした。「ドゥホボル」などの作品はその土地の回想に基づいている。高校卒業後はカナダ各地に移り住み、さまざまな職に就いたが、後に詩誌やアンソロジーの編集者などに携わる。『ひとり入り行く』 *Moving In Alone* (1963)、『夜の暗い窓』 *Black Night Window* (1968)、『洞窟』 *The Cave* (1970) 等の詩集によりプレーリー詩の先駆的存在と見なされた。『嘘』 *Lies* (1972) でカナダ総督文学賞を受賞。これらの詩集に収められた作品の主題は多岐にわたっているが、切りつめられた言葉と鮮明なイメージでプレーリー世界と自身との関わりを綴った作品に注目すべきものが多い。「どの地平からも」は、反復される章句を基調に、ある想念から想念へ、またイメージからイメージへと自由に動きながら、全体として独自のバラッド世界を作り上げた彼の代表作の一つと知られている。またこの詩にはニューラヴの詩全般についてしばしば指摘されるアンビバレントな感情の動きも見られる。プレーリー世界に対して限らない郷愁を覚える一方で、その郷愁がもたらす陥穽を避けようとする感情がせめぎ合うのである。無垢に思えた土地の記憶は恐慌の悲惨によって、あるいは先住民の征圧、彼らの精神的遺産の破壊の歴史によって剥落する。プレーリーと都市は夢の潰えた荒野という点でそれほど違わぬものとなる。底流する人間的なつながりの希求と暗いペシミズム。そこにはプレーリーの歴史や社会、あるいは男女の関係に向けられようと、欲望と空虚を見透く彼の視線が感じられる。シュルレアリスムへの接近を思わせる「機関車と海」にも同じような印象を受ける。荒寥としたプレーリー、機械文明と西部開拓の象徴としての機関車から原初の沼地や海への不気味なイメージの跳躍は、進歩への妄信がもたらす危機を暗示しているように思われる。

アンドリュー・スクナスキ (Andrew Suknaski, 1942-) はポーランド系の母、ウクライナ系の父のもとに、サスカチュワン州ウッド・マウンテン近くの入植地で生まれた。家族はウクライナ語を話し、英語は小学

校入学後に習得した。ブリティッシュ・コロンビア大学や美術学校に在学中は視覚詩にも関心を示す。プレーリー各地で様々な職に就いた後、ウッド・マウンテンに帰郷。その後、訛のある土地の英語や移住者たちのさまざまな母語を肉声として折り込む独特の語り口で、そこに住むさまざまな人々から見聞きした話などを再創造した『ウッド・マウンテン詩集』*Wood Mountain Poems* (1976) を発表した。この後のプレーリー詩の中には彼の逸話形式の詩風に影響を受けた作品も多い。「フィリップ・ウェル」、「踏切」に見られるように、彼の詩には強い孤独感、疎外感が漂う。詩人パトリック・レイン (Patrick Lane) は、住民たちの体験や記憶を採集し、それを記述して他者に伝えるという、ある意味では精神世界の剽窃をしなければならないスクナスキの微妙な立場について言及し、彼にとって詩を書くことは彼らに対する裏切りの行為として自覚されているのではないかと述べる (Cooley, *Replacing*, 96)。確かに彼の詩に散見する孤独なユダのイメージなどはスクナスキのジレンマを映じたものかもしれない。また、彼は無名の入植者たちの生を通して伝説的世界を織り上げる一方で先住民たちに対する罪の意識も吐露している。入植者の子孫でありながら、祖先の歴史の告発を記述しなくてはならないスクナスキにとって、裏切りという感情は容易に拭い去ることのできないものなのか。

ローナ・クロウツィアー (Lorna Crozier, 1941-) は、サスカチュワン州スィフト・カレント (Swift Current) 生まれ。サスカチュワン大学を卒業後、高校の英語教師を務めながら詩集を発表し続けた。またパトリック・レインをパートナーとしてプレーリー詩のアンソロジーや沿岸州の詩人オールデン・ノーラン (Alden Nowlan, 1933-83) などの選詩集の編纂に携わった。近年では60年代から70年代にかけて生まれた若い詩人たちの作品を集めた『呼吸する炎』*Breathing Fire* (1995) を刊行している。『鷹を生む』*Inventing the Hawk* (1992) でカナダ総督文学賞を受賞。他に『私たちがいなくとも存在し続ける庭』*The Garden Going On Without*

Us (1985)、最近の詩集に『生者が手放しはしないもの』*What the Living Won't Let Go* (1999) などがある。現在はヴィクトリア大学に勤務。ありふれた風景や出来事の中に日常を越えた世界を創出するのが彼女の特色である。今回の作品もプレーリーの自然を背景に、鳥、パン、馬などを中心的なイメージ媒体として、読者を別の次元へと引き連れる。また「第7日目に」、「その馬の簡潔な歴史」に窺われるような男女の関係をめぐる女性の側からの新しい神話創造の試みも見られる。しかし、「キャロット」などの連作を収める「野菜の性生活」‘The Sex Lives of Vegetables’については発刊された当時、その性描写や性的用語の使用をめぐって非難や嫌がらせを受けたという。女性たちが性について自由に語ることに対する抵抗は根強いが、現在ではユーモアを湛えたイメージ豊かな彼女の詩は多くの人々を惹きつけ、広く読まれるようになったと聞く。

以上80年代前半までの四人の詩人の作品の一部について述べてきたが、最近のプレーリー詩の動き等については稿を改めて考えてみたい。とりわけ90年代以降の電子メディアの急速な発達をはじめとする彼らを取りまく環境の変化と彼らプレーリー詩人たちの存在の基盤としての「場所の感覚」との関わりなどは一つのテーマになるかもしれない。いずれにせよ、今回取り上げた詩作品に見られるように、プレーリー詩の最良の部分は、プレーリー世界に固有のイメージ群を象徴へと昇華し、ともすれば地域的なものに留まりがちな体験の記述を普遍的なそれへと導くことに成功していると評価できるように思う。訳者の力量不足により、拙訳ではその意が十分に伝えられているとは言い難いのではあるが。

(付記) 訳詩は詩人の生年順としたが、参考のために各詩の初出年をそれぞれの作品の末尾にイタリックで記し、必要に応じて訳注(*印)を付した。また使用したテキストについては以下のように後注として掲げた。

注（テキスト）

- 1 'Stone Hammer Poem,' Robert Kroetsch, *Complete Field Notes : The Long Poems of Robert Kroetsch* (McClelland and Stewart, 1989), 1-7.
- 2 from 'Seed Catalogue,' *Complete Field Notes*, 32-34.
- 3 'Sounding the Name,' *Complete Field Notes*, 209-214.
- 4 'My Daddy Drowned,' John Newlove, *The Fat Man : Selected Poems 1962-1972*. (McClelland and Stewart, 1977), 12.
- 5 'The Hitchhiker,' *The Fat Man*, 38.
- 6 'Ride Off Any Horizon,' *The Fat Man*, 41-45.
- 7 'Doukhobor,' *The Fat Man*, 79.
- 8 'The Engine and the Sea,' *The Fat Man*, 76-77.
- 9 'Warm Wind,' John Newlove, *Cave*, (McClelland and Stewart, 1970), 15.
- 10 'Dream,' John Newlove, *Lies*, (McClelland and Stewart, 1972), 49.
- 11 'Driving,' John Newlove, *The Night the Dog Smiled*, (Toronto : ECW PRESS, 1986), 9.
- 12 from 'Indian Site of the Edge of Tonita Pasture,' Andrew Suknaski, *Wood Mountain Poems*, (Toronto : Macmillan of Canada, 1976), 78.
- 13 'Philip Well,' *Wood Mountain Poems*, 39-40.
- 14 'Ernie Hudson,' *Wood Mountain Poems*, 107.
- 15 'Nightbus to Vancouver,' *Wood Mountain Poems*, 120-121.
- 16 'West to Tolstoi, Manitoba (circa 1900),' Andrew Suknaski, *The Land They Gave Away : New & Selected Poems.*, (Edmonton : Newest Press, 1982), 74.
- 17 'The Crossing : to the memory of russell marois,' *The Land They*

- Gave Away*, 144-145.
- 18 'Loon Song,' Lorna Crozier, *The Garden Going On Without Us*, (McClelland and Stewart, 1985), 72.
- 19 'Wild Geese,' *The Garden Going On Without Us*, 76.
- 20 'Angels of Snow,' *The Garden Going On Without Us*, 14.
- 21 'Garden at Night,' *The Garden Going On Without Us*, 120.
- 22 'Carrots,' *The Garden Going On Without Us*, 99.
- 23 'Potatoes,' *The Garden Going On Without Us*, 107.
- 24 'Zucchini,' *The Garden Going On Without Us*, 112.
- 25 'The Baker,' Lorna Crozier, *Inventing the Hawk* (McClelland & Stewart, 1992), 3-4.
- 26 'On the Seventh Day,' *Inventing the Hawk*, 10-12.
- 27 'Brief History of the Horse,' *Inventing the Hawk*, 26-28.

引用及び参考文献

- Atwood, Margaret. 'How do I get out of here : John Newlove.' *Second Words : Selected Critical Prose*. Toronto : House of Anansi Press Ltd, 1982, 114-128.
- Barbour, Douglas. "John Newlove." *Canadian Writer and Their Works : Essays on Form, Context, and Development : Poetry*. Eds. Jack David, Robert Lecker, and Ellen Quigley. Toronto : ECW Press, 1992, 281-334.
- Bartley, Jan. "An Interview with John Newlove." *Essays on Canadian Writing* no. 23 (Spring 1982), 135-56.
- Brown, Russell. "Kroetsch, Robert." *Oxford Companion to Canadian Literature*. Eds. Eugene Benson and William Toye. Don Mills, Ontario : Oxford University Press, 1997, 608-10.

- Cooke, Nathalie. "Crozier, Lorna" *Oxford Companion*, 271.
- Cooley, Dennis, ed. *Inscriptions : A Prairie Poetry Anthology*. Winnipeg : Turnstone Press, 1992.
- ed. *RePlacing*. Downsview, Ontario : ECW Press, 1980.
- Crozier, Lorna. 'Speaking the Flesh.' *Language in Her Eye*. Eds. Libby Scheier, Sarah Sheard and Eleanor Wachtel. Toronto : Coach House Press, 1990, 91-94.
- Crozier, Lorna, and Gary Hyland, eds. *A Sudden Radiance : Saskatchewan Poetry*. Regina, Sask : Coteau Books, 1987.
- Geddes, Gary. "Newlove, John." *Oxford Companion*, 805.
- Geddes, Gary & Phyllis Bruce, eds. *15 Canadian Poets*. Toronto : Oxford University Press, 1970.
- Henderson, Brian. "Newlove : Poet of Appearance." *Essays on Canadian Writing* no. 2 (Spring 1975), 9-27.
- Jones, Manina. "Rooting the Borrowed Word : Appropriation and Voice in Kroetsch's 'Seed Catalogue.'" *Inside the poem*. Ed. W. H. New. Toronto : Oxford University Press, 1992, 113-122.
- Lane, Patrick. "The Unyielding Phrase" *Canadian Literature* 122-123 (Autumn-Winter, 1989), 57-64.
- Lecker, Robert. *Robert Kroetsch*. Boston : Twayne Publishers, 1986.
- Marois, Russell. *The Telephone Pole*. Toronto: House of Anansi Press, 1969.
- Munton, Ann. "Robert Kroetsch." *Canadian Writer and Their Works*, 69-186.
- Purdy, Al. "John Newlove : *Moving Alone* (1965), *The Cave* (1971), *Lies* (1973)." *Starting from Ameliasburgh : The Collected Prose of Al Purdy*. Ed. Sam Solecki. Madeira Park, BC : Harbour

Publishing, 1995, 338-45.

Scobie, Stephen. "Suknaski, Andrew." *Oxford Companion*, 1099-1100.

Spak, Harvey, ed. *Wood Mountain Poems* (Film). National Film Board, 1978.

Wood, Susan. "Participation in the Past: John Newlove and 'The Pride.'" *Essays on Canadian Writing* no.20 (Winter 1980-81), 230-40.

Woodcock, George. "Introduction." *Canadian Writer and Their Works*, 5-18.

マーガレット・アトウッド著、平林美都子他訳『スザナ・ムーディーの日記』国文社、1992.